

平成30年12月21日

鳥羽市議会議長 浜口 一利 様

総務民生常任委員長 坂倉広子

### 総務民生常任委員会行政視察の報告について

このことについて、総務民生常任委員会は平成30年11月15日～16日の二日間の行程で、下記の目的を調査するため広島県三原市を行政視察した。

- |      |  |
|------|--|
| 目 的  | 市民が居住する離島（佐木島、小佐木島）を有する三原市を訪問し、高齢者福祉と海上救急搬送に関して調査した。                       |
| 視察内容 | 11月15日 救急艇の導入経過と現状の課題及び今後の運用計画等について<br>同月16日 離島在住高齢者に対する各種支援策について（介護保険も含む） |

### ま と め

- ① 救命艇の導入・運用については、参加した委員の総意として、離島に住む高齢者だけでなく住民全体の安心につながり、夜間休日に医師不在の現状に対する心配事の緩和につながると期待できる。  
ただし、救命艇建造に係る費用に対する国・県等の補助金メニューの調査や建造・運用開始後に生じる経費の比較検討が必要であり、また運営に関する人材や体制及び予算確保など研究が必要である。  
仮に直営とした場合、単に消防職員の新規採用だけでなく勤務体制や操船にかかる船舶免許等の取得など諸課題がある。
- ② 離島に居住する高齢者への支援策については、鳥羽市の総合計画等における位置付けを確認する必要がある、高齢者が安心して離島で生活し終末を迎えられるような支援策を考える必要がある。  
また、一つの島に3つの集落がある答志島については、島内の移動手段（コミュニティバスなど）が確保できたなら、定期船航路の集約につなげられるかもしれないことから、引続き調査を行う必要がある。

以上のことから、今回調査したテーマについては、引続き、総務民生常任委員会の調査研究課題とし、かつ議員各自の活動のテーマとしたい。

参加委員の報告は、別添のとおり



三原市議会本会議場にて



11/15 視察 説明員 三原市消防本部



三原市の導入している救命艇（奥）



11/16 説明員 三原市高齢者福祉課

## 行政視察報告書

総務民生常任委員長 坂倉 広子 様

総務民生常任委員会委員 坂倉 広子

<b>視察年月日</b> 平成 30 年 11 月 15 日 (木) ~11 月 16 日 (金)
<b>視察先及び視察目的</b> 広島県三原市 11 月 15 日 救命艇の導入経過と現状の課題、今後の運用計画等について 11 月 16 日 離島在住高齢者に対する各種支援策について (介護保険を含む)
<b>説明者</b> 三原市消防本部消防長 宮田寿嘉氏、総務課課長補佐 宗田博之氏 三原市保健福祉部高齢者福祉課長 石原 洋氏、同課課長補佐 岡本奈緒美 氏 同課地域福祉係主任 木村 氏
<b>参加者</b> 委員長 坂倉広子 副委員長 奥村 敦 委員 井村行夫、戸上 健、浜口一利 執行部随行 益田消防長、事務局 上村次長
<b>成果・所感</b> 三原市 人口約 11 万 3 千人 2 つの離島を掲げる。新幹線の駅と空港と港各方面からアクセスの良い三原市でした。離島 (佐木島・小佐木) 島の人口 (705 人) 今回視察の目的は、離島の救急医療体制について伺う。救急艇にて離島住民の搬送をしている。(救急艇かもめ) 救急艇を建造に、至った経緯について、佐木島 (人口 698 人) 小佐木島 (人口 7 人) からの救急搬送は、定期船・民間船により、三原港等に患者が直接来て救急搬送していた事へ対応するための導入。島の救急体制 (H14 年 11 月) ①救急艇「かもめ」就航。予算:30,000 千円② (H22 年 さぎしま救急搬送車) 小型バン。予算:2,100 千円。1 救急艇を建造に至った理由。2 救急艇活用の現状について。3 予算について。4 購入の財源の内訳について。5 ランニングコストについて。6 出動までの流れ。6 耐用年数について。7 出動状況について。8 運用上の問題・課題点について。9 ドクターヘリなど他の救急搬送方法との実績について。9 救急艇の操船は消防職員が行なっているのか、もし職員が操縦する場合操船免許など資格を要するのであるならば、どのような支援をされているか。10 当該操船の基地の管理等について聞く。消防職員 (実員) 168 名 (小型船舶操縦士) 67 名。救急艇の見学もさせて頂きました。イメージとして、プレジャーボートのようで、運転席が外のため、雨の日は、大変ではないかと、思いました。  16 日は、三原市における離島在住の高齢者に対する支援について聞く。鷺浦町 (佐木島・小佐木島) 農業 (営農) メロン、みかん、ネギは日本生産一位。毎年 8 月トリアスロン大会が開催。幼稚園 小中学校があった。幼稚園は閉鎖。中学校は統合され、鷺浦小学校はある。地域コミュニティー交通循環バスが運行されています。70 歳高齢者佐木島循環バスに限り敬老優待乗車証を交付している。佐木島内 (介護施設・三原市ディサービスさぎうら) のみで、指定管理者が施設運営

している。

佐木島内の各地域にふれあいいいききサロンが月 1 回開催している。食事会や、体操など介護予防に取り組む。月 1 回健康相談会を開催し保健師や地域包括支援センターの専門職が相談に応じている。H29 年度生活支援体制整備事業として、「鷺浦町内会 地域福祉ネットワーク会議」を立ち上げ島内の地域福祉を推進し、住民同士が支え合える取り組みを始めている。高齢化率は、66,5%  
在宅高齢者の状況について伺う。

所感

救急艇及び救急搬送車については、離島を守る救急体制として 24 時間体制である。救急搬送車については、カーフェリーで搬送となる。消防職員の救急救命の使命感と離島は、陸とは違うので海の航路をどう繋いでいるのか実際視察に伺いとても勉強になった。鳥羽市において、調査、研究していきたい。

## 行政視察報告書

総務民生常任委員長 坂倉 広子 様

総務民生常任委員会委員 奥村 敦

<b>視察年月日</b> 平成 30 年 11 月 15 日 (木) ~ 11 月 16 日 (金)
<b>視察先及び視察目的</b> 広島県三原市 11 月 15 日 救命艇の導入経過と現状の課題、今後の運用計画等について 11 月 16 日 離島在住高齢者に対する各種支援策について (介護保険を含む)
<b>説明者</b> 三原市消防本部消防長 宮田寿嘉氏、総務課課長補佐 宗田博之氏 三原市保健福祉部高齢者福祉課長 石原 洋氏、同課課長補佐 岡本奈緒美 氏 同課地域福祉係主任 木村 氏
<b>参加者</b> 委員長 坂倉広子 副委員長 奥村 敦 委員 井村行夫、戸上 健、浜口一利 執行部随員 益田消防長、事務局 上村次長
<b>成果・所感</b> 1. 救命艇の導入経緯と現状の課題について 救命艇の出動状況は、29 年度において。救命艇かもめ 72 件と出動している。佐木島においては農業が中心となっている。また、島への交通手段としては民間のフェリーが行き来をしている。 その点、鳥羽市の離島においては、漁業が中心となっており、緊急の際は漁船での搬送が可能である。 その点を比較しても、環境の違いがある。 また、救命艇を導入するには、消防署職員において、船舶免許取得が複数人必要ということから、鳥羽市においては、消防署職員の数からみてもこれ以上の負担は避けなければならないと思う。 予算面においても、現状のドクターヘリ、海上保安庁、警察、漁船の手助けの中、引き続き続行するしかないと思う。 2. 離島高齢者に対する支援策について 三原市においても、鳥羽市同様、人口減少及び高齢化問題が深刻である。 その中で、様々な施策が実行されてはいるが、ほぼ鳥羽市と同様化と思う。 ただ、佐木島においては地域コミュニティー交通ということで、循環バスが運行しています。これを鳥羽市の答志島において導入できれば、答志、答志和具、桃取を路線とし、地域コミュニティーが図られるのではないかと思われる。

## 行政視察報告書

総務民生常任委員長 坂倉 広子 様

総務民生常任委員会委員 井村 行夫

<b>視察年月日</b> 平成 30 年 11 月 15 日（木）～11 月 16 日（金）
<b>視察先及び視察目的</b> 広島県三原市 11 月 15 日 救命艇の導入経過と現状の課題、今後の運用計画等について 11 月 16 日 離島在住高齢者に対する各種支援策について（介護保険を含む）
<b>説明者</b> 三原市消防本部消防長 宮田寿嘉氏、総務課課長補佐 宗田博之氏 三原市保健福祉部高齢者福祉課長 石原 洋氏、同課課長補佐 岡本奈緒美 氏 同課地域福祉係主任 木村 氏
<b>参加者</b> 委員長 坂倉広子 副委員長 奥村 敦 委員 井村行夫、戸上 健、浜口一利 執行部随員 益田消防長、事務局 上村次長
<b>成果・所感</b> 1. 救急艇の導入について 経緯と現状を聞いて ① 印象に残っているのは、三原市の市民と行政が 2 つの島の住民の命と健康を守っていかうという意識の強さを感じた。 ② 首長の意思で救急艇が実現したとの事、これも島民の暮らしと健康思う気持ちの表れである。 ③ 鳥羽市の離島 4 島現在の緊急体制は民間の観光船による緊急体制が夜間・観光船の高齢化に伴い搬送が出来なくなる現状、時前船の持っている人が親戚などあればそれなりに搬送出来るが、漁などで船主不在の問題がある、解決方法として救急艇の導入をしなければならない。 ④ 離島 4 島の救急体制として、船での搬送は不可欠である。予算としてプレジャーボート改良型で 3 千万円、年間維持費として平均 175 万円、修繕費平均 70 万円ほどである思ったよりは経費は少なく思った。しかし財政難のおりから国・県の支援を仰ぐしかない。 ⑤ 鳥羽市に救急艇の導入をするならば、和具に拠点を置き、桃取・菅島・坂手への出動は鳥羽港より時間距離は解決する。人命救助には医師の人命判断が必要であるが、各離島地区の診療所の先生が常駐していないことから夜間や休診・不在の問題がある。和具か桃取に医師の在住が必要または救命士の確保が不可欠である。 ⑥ 今回の視察において、鳥羽の離島 4 島の高齢社会の救急体制をクリアするにはドクターヘリ・救急艇の配置整備を急がなければならない。それには、予算と首長の決断にかかっている。島民の安心安全の実現に提案すべきものである。

- ⑦ 24 時間本土の救急体制は車両によって解決するが、橋が架からない離島の場合船とヘリの助けを必要とする。このことを解決しないと島離れ・離島の人口減少に歯止めはかからない。
- ⑧ 鳥羽市離島緊急搬送運行管理実施協議会を立ち上げこれからの緊急搬送について消防署が中心となり各離島の代表者話し合いの場づくりを提案する。

## 2. 離島在住高齢者に対する各種支援策について

- ① 三原 2 島の人口 705 人内 60 歳以上 533 人高齢者率 57.3%  
指定管理のデイサービス・配食サービス・ふれあい電話設置  
(佐木島の) 島内循環バス・航路支援・ふれあいサロン等の支援がなされ、交通機関に対しての補助メニューが充実していること、特に (小佐木島の) 離島介護サービス提供に伴う交通費援助帰路便まで介護サービス業者に対して待機時間 1 時間につき 1,000 円の追加補助には感心した。
- ② 産業として海の産業がなされている方は少なく、農家が多く農協が存在する。トライアスロンの大会等観光に力をいれ高齢者離島として頑張っていることに感心出来れば佐木島に行ってみたかった。
- ③ 議長さんをはじめ各担当の課長さん方の丁寧な説明と歓迎に感謝でした。

## 行政視察報告書

総務民生常任委員長 坂倉 広子 様

総務民生常任委員会委員 戸上 健

<b>視察年月日</b> 平成 30 年 11 月 15 日 (木) ~11 月 16 日 (金)
<b>視察先及び視察目的</b> 広島県三原市 11 月 15 日 救命艇の導入経過と現状の課題、今後の運用計画等について 11 月 16 日 離島在住高齢者に対する各種支援策について (介護保険を含む)
<b>説明者</b> 三原市消防本部消防長 宮田寿嘉氏、総務課課長補佐 宗田博之氏 三原市保健福祉部高齢者福祉課長 石原 洋氏、同課課長補佐 岡本奈緒美 氏 同課地域福祉係主任 木村 氏
<b>参加者</b> 委員長 坂倉広子 副委員長 奥村 敦 委員 井村行夫、戸上 健、浜口一利 執行部随行 益田消防長、事務局 上村次長
<b>成果・所感</b> <b>【全体印象】</b> ほとほと感服した。700 人しかいない島民を行政も議会も本当に大事にしている。救急艇も高齢者支援策も学ぶところ大。実り多き視察であった。  <b>【視察から学び鳥羽市行政に生かす点】</b> ① 離島の位置づけを改めて浮き彫りにすること。産業、文化、歴史、民俗風習など多方面から改めて光を当てる ② そのうえでかけがえのない離島の存在を行政の柱の一つに据える ③ 離島個々の特性に応じた産業振興策に本腰を入れて取り組む  <b>【視察項目の具体的状況】</b> ・救急艇について 島までフェリーでは 25 分を要するが救急艇は 15 分~16 分。島民 700 人を対象に年間 60 件から 70 件出動。平成 14 年の就航以来 921 件にも及ぶ。「命を救われた島民は数知れない」と消防長の弁。 島内には「小さな救急車」と呼ぶミニバンの救急搬送車もある。地域の協力を得て運行している。 導入費は船体費 2,000 万円、救急資材費 600 万円。毎年のランニングコストの多寡はあるが 114 万円から 264 万円の範囲。 島民 3,300 人の鳥羽からまさに不可欠の事業である。鳥羽でもぜひとも取り入れたい。



・離島高齢者にたいする支援策について

① 島民 705 人のうち 65 歳以上の高齢者が 66.5%の 469 人。島にとって高齢者支援は重要課題になっている。島に町内会長、民生委員ら 13 人で「地域福祉ネットワーク会議」を立ち上げて対応している。

② 島民の足を守る

島内に循環バス。10 人乗りで月曜から金曜まで毎日 8 便運航。70 歳以上に敬老優待券を発行し 1 人 100 円で何回でも乗れる。市の補助は 171 万円。

航路も 70 歳以上に敬老優待乗船券を年間 82 枚交付。片道 670 円のところ 100 円で乗船できる。市から 1,075 万円補助 (29 年度)。

③ 介護施設支援

(佐木島) 指定管理制度で民間事業者が運営。管理料として市費 650 万円

(小佐木島) 介護サービス事業者に対して渡航費相当額と次の帰路船便までの待機時間 1 時間につき 1,000 円を追加補助している。市費 257 万円を投入。

・その他

島に小学校がある。児童数 11 人。うち島民は 5 人。あと 6 人は島外の子どもたち。特認校に指定し通学費は全額市が補助している。

「20 人を切ったら統廃合という方針はないのか」と質問すると「統廃合など考えたこともない」。明快な姿勢だ。

## 行政視察報告書

総務民生常任委員長 坂倉 広子 様

総務民生常任委員会委員 浜口 一利

<b>視察年月日</b> 平成 30 年 11 月 15 日 (木) ~ 11 月 16 日 (金)
<b>視察先及び視察目的</b> 広島県三原市 11 月 15 日 救命艇の導入経過と現状の課題、今後の運用計画等について 11 月 16 日 離島在住高齢者に対する各種支援策について (介護保険を含む)
<b>説明者</b> 三原市消防本部消防長 宮田寿嘉氏、総務課課長補佐 宗田博之氏 三原市保健福祉部高齢者福祉課長 石原 洋氏、同課課長補佐 岡本奈緒美 氏 同課地域福祉係主任 木村 氏
<b>参加者</b> 委員長 坂倉広子 副委員長 奥村 敦 委員 井村行夫、戸上 健、浜口一利 執行部随行 益田消防長、事務局 上村次長
<b>成果・所感</b> 三原市は広島県の中央東部に位置する市で、人口が (30 年 9 月末) 94,730 人、古くから瀬戸内海の海上交通の要衝として発展してきたそうです。陸路においても新幹線の駅が有り、この地域の海、陸交通の要として発展してきたことが分かります。 今回の視察目的は、離島における夜間救急医療体制と離島在住高齢者への支援についての、三原市の対応、考え方を聞きに来ました。鳥羽市 4 離島も神島以外は夜間医者がいなくて、住民に不安感が有ります。安心して住んでもらうためには何らかの対策が必要です。 ◎「救急艇導入経過と現状の課題、今後の運用計画について」 まず、救急艇運用を担う三原市消防本部には三原市と世羅町の 1 市 1 町を管轄していて消防職員 169 名、消防団員 1,995 人、本署の他に 2 分署、4 出張所で組織されています。鳥羽市と比べて規模も大きいですが、各地域に分署、出張所が配置され 144 名もの職員が常にいることで地域の住民も安心感があると思いました。 救命艇ですが、平成 14 年就航、最大速力 34 ノット、12 名の搭乗が可能です。離島の佐木島へは 15 分で到着、救急車に搭載されている医療器具が揃っているのので即、救命救急措置が可能なので住民にとっては有難いことです。 平成 29 年度の搬送人員 68 名、救命艇「かもめ」運航には小型船舶操縦士の海技免許が必要ですが、67 名もの職員が自費で海技免許を取得しているとのこと。熱意が伝わってきました。 「かもめ」建造、運用していく中でランニングコストなど経費はかかりますが、離島住民にとっての安心、安全のために鳥羽市も早急に導入すべき事業との思いを強く感じました。

◎「離島在住高齢者に対する各種支援策について（介護保険も含む）」

三原市の離島は佐木島、小佐木島があり、二つの離島で鷺浦町、平成 30 年 3 月末の人口が 705 人、高齢化率 66.5%と三原市の 33.8%と比べると高くなっているのは、何処の離島も同じ悩みがあります。

佐木島内の各地区にふれあいいきいきサロンが月に一回開催されて、介護予防に取り組んでいます。鳥羽市においてもサロン活動を活発にして「つながり」を進め地域のリーダーを育成していくとの考え方が示されたところです。介護施設は「三原市デイサービスセンターさぎうら」が有ります。

又、島内に移動支援のための循環バスを運行していて、鷺浦町居住の 70 歳以上の高齢者に優待乗車証を交付していて、100 円で乗れます。離島航路は鳥羽市もそうですが、離島住民にとって生活の足、三原市は一回 100 円の自己負担の優待券を年間、82 枚交付しています。

又、離島介護サービスを提供している事業者に対して、離島へ渡るための費用を補助していること、それと共に船便が少ない事（小佐木島）で待機時間 1 時間につき、1,000 円の追加補助もあるとの事でした。この事については鳥羽市内の、事業所から要望が多く有りますが少しでも改善されればと思いました。

鳥羽市には 4 離島が有り、人口減少、高齢化が顕著に進んでいます。離島在住の高齢者、要介護者は本土とは違う支援策が求められています。三原市はフェリーボート、高速船も民間会社が運航しています。鳥羽市は定期船事業を市が運航していますので違いはあるとは思いますが、全てに万全には行かないけれど一歩でも前に進めるようにして行きたいと思えます。

三原市には佐木島、小佐木島 2 島有りますが、市民の離島を大切にしていきたいとの思いが話を聞いている中で感じました。仁ノ岡議長はじめ、消防職員、福祉を担当する方々の話ぶりからその事を感じましたが、佐木島住民も島の活性化に向けて活発に動いているようでした。